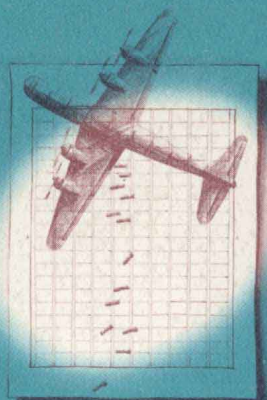


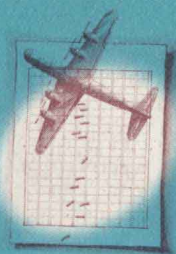
平和への願いをこめて
8 聞き書き(千葉)編
創価学会婦人平和委員会編



母たちの戦場

B 29の爆音をふりあおぎ
炎の中を逃げまどった
母たちは

いま、その「戦場」を静かに語る
子らのために――



《シリーズ》平和への願いをこめて⑧
聞き書き(千葉)編

母たちの戦場

昭和五十八年七月七日 初版第一刷発行

編者 創価学会婦人平和委員会

発行人 栗生一郎

発行所 第三文明社

東京都千代田区猿樂町二五十四

電話(二九四)八七三一(代)

振替・東京 五一・一七八三三

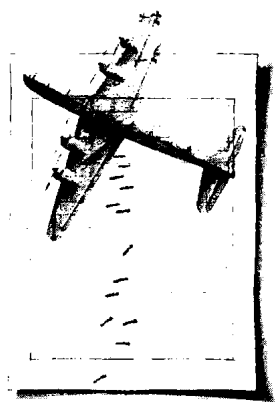
印刷所 図書印刷株式会社

ISBN 4-476-07508-8

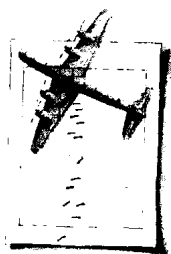
* 乱丁落丁本はお取り替えいたします

Printed in Japan

平和への願いをこめて
⑧聞き書き(千葉)編
創価学会婦人平和委員会編



母たちの戦場





“雨のように。”という形容が、決して大げさではない焼夷弾の投下写真。
数センチ角、30～40センチの長さの筒状に油脂をたっぷり呑みこんで
大地を焼き尽くすために落ちてくる。着地寸前の写真(下)は、タンポポ
の種の舞うように見えるが、この直後には火をふき、人々を焼き殺す。



高い空から舞い落ちてくる焼夷弾の猛火に
 消火訓練は、どれほどの役に
 立ったのだろうか
 近代兵器対ナギナタの戦さを
 母たちは強いられたのだ



まえがき

創価学会婦人平和委員会の編纂による「平和への願いをこめて」のシリーズも大好評のうちに巻を重ね、この度、第八巻として千葉編『母たちの戦場』を刊行する運びとなりました。本巻では委員会によせられた数多くの原稿の中から戦前・戦中・戦後を通しての幅広い体験を選ばせて頂き、その人達に直接お逢いして、有りのままに語って頂いた生の声を聞き書きとしてまとめました。

つい、昨日までは、ささやかでも、平和であった家庭が、町が、一瞬にして破壊される恐ろしい戦争の実態、それを経験した人達の声に接するとき、さまざまな形で、女性が戦争と深くかわり、その傷みは消えることなく生きている事が、この書には実に鮮かに浮彫りされています。戦火の中をくぐり抜けた人の中に、戦争未亡人に、特攻隊を見送った人に、戦場にかり出された女たちの中に、まさに戦争がもたらす幾多の悲劇の縮図を見る思いがいたします。

それは、多分に千葉県的位置されている地理的「宿命」によるものなのでしょうか。千葉県は銚子の犬吠岬から北海道北端へは、約一、一〇〇km、また、九州本島の南西端へは、やはり約一、一〇〇kmで日本列島のほぼ中央に位置した半島です。房総の沖合いには黒潮が流れ、特に房州は

温暖で冬でも菜の花が咲き、農水産、林業と海の幸、山の幸に恵まれております。

ところが、江戸川・東京湾をはさんで、東京・神奈川に接するという便利さが、太平洋戦争が始まると共に、主都圈衛という重荷を背負う羽目となり、産業の宝庫は次々と軍事基地に置きかえられていきました。特に、東京湾沿岸は、重要要塞地帯となったのです。

解説の中にも資料として掲載してありますが、千葉全県にわたって、航空隊、憲兵隊、気球隊、無線電信隊が設置され、特攻隊も数多く出動しています。

こうした中で統後を守る女性のけなげな奮戦ぶり。その甲斐なく昭和二十年七月七日未明の三度目の千葉空襲では、全市がほぼ壊滅状態となり、家を焼かれ、親を姉弟を主人を失い、生きた地獄絵図と化したのです。

悪夢の日から三十八年——めざましく復興した町並みには、その爪あととはほとんど残っていない現在ですが、あの戦争の悲惨な傷跡は、被災者の胸から生涯消える事はないでしょう。

二度と愚かな戦争をくり返してはならないと「絶句」する体験者の声は、そのまま、平和を願望する声でもあり、「戦争を知らない世代」の母親達に、語り継ぐための証言として、これ以上確かなものはないと確信致します。

本巻では評論家の鈴木均先生には「戦争の自分史」のタイトルで執筆していただきました。更に、座談会ではさまざまな戦争体験を形骸化させないために、すでに五割にものぼるといふ「戦

争を知らない世代”の母親達にどう語りついでいくべきかという親点から、歴史研究家でもある、元・公立高校長の梶原昌夫先生、エッセイストとして、つとに名を知られる千葉工業大学教授の木村治美先生に、貴重な、ご意見を頂きました。

防衛費が拡大され、いつ、戦争に巻き込まれるかわからないきなくさい現状の中で、この一書が若い母親達の平和へのうねりを高め、この書をもとに、自らが子や孫たちに語り継いでいく行動の発火点となって頂ければと、心から願わずにはられません。

なお、創価学会婦人平和委員会では、昭和五十五年十二月に発足以来、戦争体験証言集の出版のほかに、「婦人と平和を考える」講演会を開催し、多大な反響をいただいております。

今後、こうした活動を地道に重ねてまいります。読者の皆様の貴重な御意見、体験等を、委員会宛に、どしどしお寄せ頂ければ幸いです。

最後に出版にあたり、執筆・編集に多大な御尽力をいただきました多くの同志の皆様方、および第三文明社の方々に心よりお礼申し上げます。

昭和五十八年七月七日

創価学会婦人平和委員会

委員長 浅野香代子

もくじ

まえがき

I 炎の中を生きのびて

〈千葉空襲〉

機銃掃射の中を生きのびて……………斎藤かね 13

“最後の別れ”に涙した料亭倉田家……………松本澄子 24

ザクロのように割れた妹の頭……………三枝和子 31

血とススにまみれた夫の死体……………土居都代子 39

〈銚子空襲〉

電動式地下壕で散った親友……………黒田まさ子 47

手足にのこる空襲の爪あと……………宮内弘子 55

教え子の無事を祈った日々……………安藤兄子 62

兄の遺骨は石ころひとつ……………杉浦てる子 72

〈茂原空襲〉

「生命だけは」と逃げ回った日々……………大多和とく 77

〈館山空襲〉

涙で見送った少年特攻兵……………伊藤た幾 82

流れついた缶詰が爆弾だなんて……………鈴木文子 87

Ⅱ 母たちの戦場

〈銃後の守りといわれて〉……………桜井清子 97

戦争に奪われた“妻の魂”……………池田とよ 106

母と娘が生き抜いた戦中戦後〈Ⅰ〉……………宇畑房子 112

母と娘が生き抜いた戦中戦後〈Ⅱ〉……………露崎こう 119

「伴を返せ」「兄きを返して」……………高宮君子 127

お腹いっぱい食べさせたい……………伊藤せい 137

〈かり出された女たち〉……………小川美智子 145

大日本国防婦人会……………太田和光子 152

女子消防隊救護班……………所長子 162

勤労奉仕……………

女子挺身隊……………

看護婦	大野せき	170
女性通信士	半田利江	178
〈母も子も飢えて〉		
供出に泣かされた農家	鈴木貞子	187
白い御飯は夢の中だけ	柘野貴美枝	195
疎開児童の"母"だった柏原先生	大野ひさ	204
〈戦時下に新たな生命が〉		
炎の中の出産、そして死	橋本あさ子	211
助産婦として生きる	影山よし	214
〈占領下の街で〉		
敗戦のつけを払わされた女たち	匿名	226
〈座談会〉戦争体験をどう語り継ぐか	木村治美／梶原昌夫 今野しげよ／平栗節子	233
〈解説〉戦争の自分史	鈴木均	253
編集後記		

I 炎の中を生きのびて

機銃掃射の中を生きのびて

さいとう
斎藤かね(59歳)
市原市在住



◇夫は南方の戦地に。四歳の男児と実家に身を寄せている時、七月七日の千葉空襲を受ける。雨あられのように降る機銃掃射の中、老いた病身の母と九歳の妹をかばいながら幼子を背負い、紙一重の差で九死に一生を得、空襲の恐ろしさを体中で体験した。

戦争が終わってもあのサイレンの音が、おっかなくてねえ。お昼のサイレンが鳴っても当分の間は、「空襲だ！」って反射的に体が動くし、頭からサーッと血の気の引くような思いをくり返しましてね。

当時千葉市東本町の実家に住んでおりまして二十三歳でした。三月九日の東京空襲で、顎をと

ばされちゃった父が、やっと治って病院から帰って来たんです。その矢先の事でして、妹が、さ
さやかな七夕をかざった、七月六日の夜九時頃でした。

いつものように、警戒警報のサイレンが、ウーと鳴り響き、大急ぎで電燈の暗幕をおろしまし
て、ものの二十分もたたないうちに、今度は空襲警報が、無気味に鳴り響いたんです。そして間
髪入れずに、物凄い爆音と、炸裂音が、聞こえて来ましたから、これは大変だ、今度こそやられ
る、来たぞって、直観したもんで、とにかく逃げようって、父と弟はオートバイに大切なものだ
けを、さっとまとめて、半里先の加曽利町の山林にこさえた防空壕（横穴式）に走ったんです。あ
の頃は、後に大きな荷台のついた、オート三輪車ってのが、あったんです。父達は、荷物をおろ
したらすぐ、私達女子供をむかえに、引き返すことになっていたんですが、残された私と息子の
善久（四歳）妹の啓子（九歳）と、ガンを患って寝たり起きたりの病身の母の四人は父達の引き
返すのが待ちきれず、ただ、防空頭巾と観音像だけをかかえ、ところが笑わないで下さいね、恥
ずかしいんですが、あとで気がついたら、防空頭巾だと思ったのが、お腰をかぶってたんです。

私は善久をおぶって、妹と母を追ったてるように、家を出ました。

家を出た途端、はす向かいの煙草屋さん夫婦が物凄い声で、

「鈴木つあん、逃げるのかやあー、非国民だぜー」って、そりゃあすごい声でした。鈴木
ってというのは、私の旧姓ですけど、私には幼い子供と妹と病身の母がいます。三人の命を守ら

なくちゃあいけませんから、「ハイ、ハイ」って受け流し、無我夢中で逃げましたよ。誰だって命が惜しいんです、そりゃあ逃げますよ。

すでに敵機は、東金の方から、照明弾を、ドンドン落っことし、ピカピカピカピカ、それは、何十発もの火花が一度にあがったような、真昼以上の明るさで、蟻の子一匹でも動いたら判るような、異常な明るさでした。

東金街道上空を、何百機かと思われる艦載機が募進して来たのです。ゴォーン、ゴォーン、ゴォーンと、タンク（戦車）が走ってくるような爆音は物凄かったです。そのすぐ後に油脂焼夷弾をドンドン落とされて、あっという間に空高く、火柱が立ち昇り、あたり一面火の海でした。

広い道路も右往左往する人の群、そりゃあもう、まったくの紅蓮地獄でした。恐ろしさに腰もぬけんばかり、熱風を乗せて吹き寄せてくる黒煙の中で、旭町の大通りにぬけた時、「にいな（現在の仁戸名町）の方に、逃げっというどー！」とだれかが叫んでいましたが、私らは都川をめざして夢中で駆けました。それが、今思えば、魔の都川の第一歩だったんですね。

ようやく都川の土手沿いまで出ました。その近くの医大生の寮に、大きな防空壕があったんで、火焰の火照りで体中熱くもあり、何よりも病身の母を気づかっていたので、夢中で、「熱いんです、一時はいらして下さい。お願いします！」と必死で頼んだんです。そうしましたら、「おまえ達なんか入れる所はないっ。関係のないものは入れないぞ！」と、まるで犬か猫を追っばらう